

校 友 會 誌

第 四 十 八 號

昭 和 四 十 二 年 二 月 十 二 日 發 行

滋 賀 縣 立 彥 根 中 學 校

謹ミテ 我ガ 皇室ノ御稜威ヲタタヘ

奉リ 我ガ皇軍ノ偉業ヲ感謝シ 戦歿

諸勇士ノ英靈ノ冥福ヲ禱ル

校友會誌 第四十八號 目次

口 繪
 一、第五十一回卒業生
 一、故千原先生肖像、遺骨歸還、告別式
 卷頭言
 新人材論
 生徒作文
 學校長 尾田鶴治郎先生
 客員 尾田鶴治郎先生
 四二

武漢陷落の報を聞く……………五年
 時局の認識……………五年
 我が理想の學生生活……………五年
 山を登る……………五年
 夜の瞬き……………五年
 西村君の死……………四年
 勤勞奉仕の感想……………四年
 勤勞奉仕の感想……………四年
 漢口陷落と吾人の覺悟……………三年
 漢口陷落……………三年
 勤勞奉仕……………三年
 代用品時代……………二年
 滿洲の落暉……………二年
 漢口攻略成る……………二年
 漢口陷落……………二年
 勤勞奉仕についての感想……………二年
 秣刈り……………二年
 勤勞奉仕の感想……………二年
 慰問文……………二年
 慰問文……………二年
 中山英男
 二四

漢口陷落……………中山英男 二四

詩
 短歌
 俳句

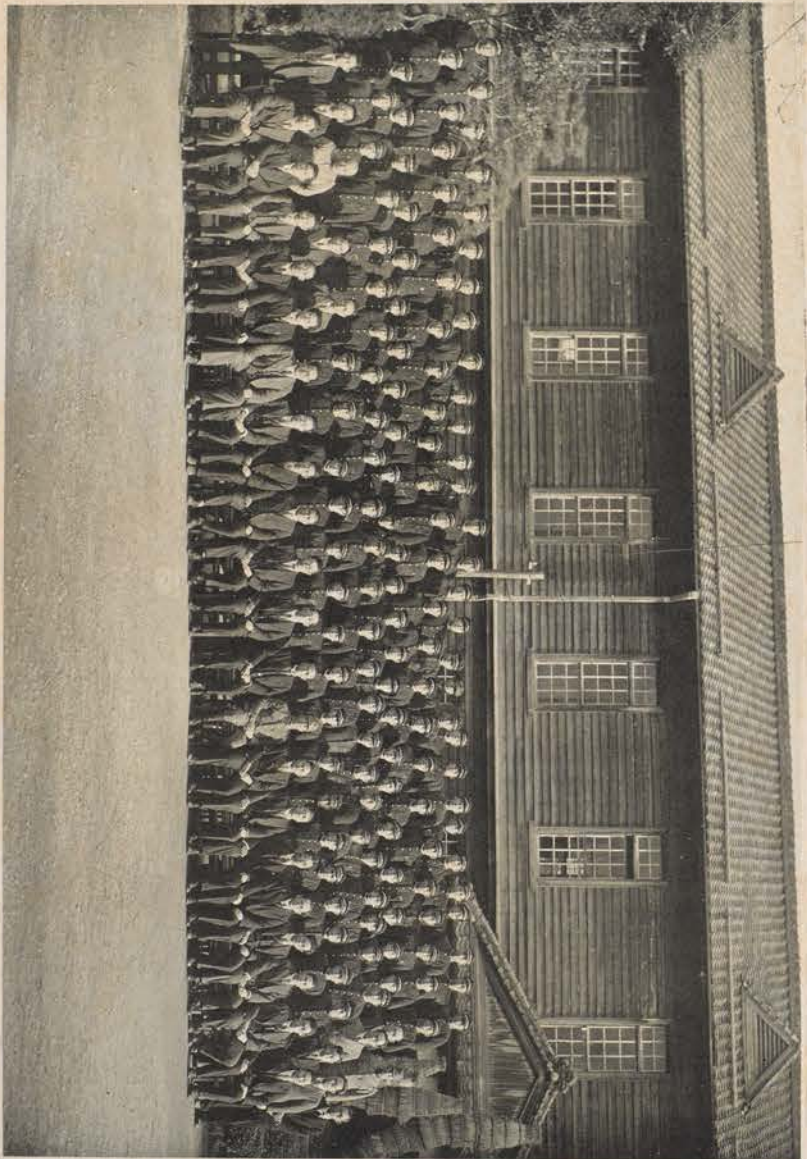
故千原先生追悼特輯

一、はしがき……………三六
 二、故陸軍砲兵大尉千原輝一先生告別式記事
 戦死——校葬準備——二十六日記——告別式——祭詞——
 式辭——生徒作文校葬記……………三五
 三、弔辭、弔電其の他……………五八
 四、千原先生略歴……………五八
 五、遺稿——陣中最後の日記……………六〇
 六、追悼錄……………六一
 噫 千原先生……………六四
 生徒作文……………六四
 客員 平井乙磨先生……………六四
 消息 陣中だより……………七二
 桂巻喜一氏——山口保雄氏——上田誠次氏……………七二
 第五學年櫻庭野演習記……………七六
 集團勤勞奉仕日記……………七九
 雜錄……………八五
 學校日誌抄——校友會役員——校友會會計……………八九
 編輯了語……………八九

校歌

—澤村專太郎氏作歌—

- 一 湖べの春にかざられて
籠の若葉新しく
- 二 緑静けき學びやに
明けはなれゆく人の世の
- 三 不撓の決意と力行の
幸とほまれに美はしく
- 四 剛健自助の門によりて
たてる金龜の學びやの
- 五 金剛不壞のこゝろもて
われらが窓の燦爛と
- 六 天のかゞやき地に享けて
金龜の春とこしへに
- 雲吹き拂ふ膽吹山
我等が園は輝けり
- 智徳の扉啓きつゝ
我等が窓に光あり
- 若き生命にまもられて
我等が園はかがやけり
- 湖畔のまもり嚴かに
あゝ譽ある幾春秋
- 勉め勤しむ森のかけ
あゝほまれある幾春秋
- こゝろ澄みたる琵琶の湖
我等が園は新たなり



影肖生先原千故



還 歸 骨 遺



式 別 告

校訓

本校生徒ハ 聖旨ヲ奉體シ 敬神崇祖
質實剛健 勤勉力行 和衷一心 以テ
至誠奉公ノ國士タルベシ

年頭雜感

學校長 足立芳之助

無始より無終へと限りなく移り行く時の一區劃として、昨日と今日に何等の變りはない筈であるのに、一月元旦といへば、心のおのづと改つてくるのをどうすることも出来ない。ありとあるものみな一變して、こゝに新しく出直すかみえる。更始一新とでもいふのであらうか。今年こそはと希望に輝き決意に燃えて、勃々たる意氣の湧き上つてくるを覚えるのは、人みな同じことであらう。わけても本年のやうに、千載一遇ともいふべき興亞の新春を迎へては、われらの感懐はまた格別であるが、いまはそれには觸れないで、たゞさゝやかな祈りの一つを認めておくこととする。人の世は日増しに事が繁くなり、自分は年をとるにつれてしたいことが多くなる。そのせむか、日々の生活が兎角慌しくなり勝ちであるので、この記念すべき新春からは、常に落着いた氣持をもつて仕事をするやう工夫をしたい。心にいつも餘裕をもつて不退轉の精進をしてゆきたい。これが自分のさゝやかな祈りの一つである。

○ 自分の幼いときのことである。ある年の元旦、自分は過つて大事の皿を落して、がちやつと壊したことがある。子供ながらも、困つたことをしたと自分は思つた。他の人達も同様、元旦早々困つたことをしてくれたいといつた顔つきであつたやうに覺えてゐる。自分はお目玉を頂戴することゝ觀念をしたのである。と、父は、極めて優しい聲で「數が殖えてお芽出たい。」といつて、如何にもお芽出たいやうな様子をしたので、和やかな場面が復活した。しかし自分は、期待とは對蹠的な父の outf に、助つたといふよりも寧ろ拍子抜けがしたやうであり、また淡い滑稽味

をさへ感じて、何のことやら判じかねたのであつたが、このごろになつてやうやくその深遠な意味が判つてきたやうに思はれる。新年はお芽出たいときであり、お芽出たかるときであるから、凡そお芽出たさと逆行したり、お芽出たさを減殺したりすることを忌むのあまり、過つて物が壊れても懐れたといふ不吉な言葉を避けて、數が殖えたといふお芽出たい言葉を使ふのではなからうか。これはことさらめいて不自然な感がしないでもないが、そこに意味の深いものがあるのである。そして數が殖えてお芽出たいといへば、不思議なことには自然お芽出たいやうな氣持の湧いてくるものである。殊に、わが國の古典には「詔り直し」とか「見直し」とかいつた言葉がよく出てくるのであつて、これは物事を善意に解する意味をもつものであることを思ふとき、自分がかうした偶發の一些事にも、わが大和民族の美しい姿を見るやうに覺えてならぬのである。加ふるにわれらの祖先は積極進取の氣魄の持主であつて、如何なる艱難に遭著しても、これに壓倒されて弱音を吐くといつたやうなことは絶対になく、それとは反對に、よくこれを克服してそのたびに飛躍を遂げてきたものである。いまの場合について考へてみても、皿が壊れて困つたと歎くかはりに數が殖えてお芽出たいと喜ぶのは、單に物事を善意に解するといふばかりでなく、そこには同時に強い積極進取の氣魄が躍動してゐるのを見通すことは出来ないのである。新年には人の心が改つて、かうした本然の相が蘇つてくるのであらうが、新年の氣持はやがてこれをその一年の氣持とすべきものではなからうか。

○ この十日に入營することゝなつてゐる教へ子の誰彼が挨拶に来る。そして新しい國旗を出して自分に署名を求めるのである。支那事變が勃發してから、國旗に署名をしたり、或は武運長久とか至誠奉公とかいつた文字を書きたことは幾度か判らぬくらゐであるが、國旗に向へば、いつも自分は心が淨つて、純一な眞劍の氣持になつてくるのである。この純一な眞劍の氣持を誠といふ文字で表現しても別に不都合はないと自分は信じてゐる。隨つて自分の書する文字もまた自分の誠の表現であるといつて差支はないのであらう。征くものゝ誠が自分の誠に通じ、それが表現されて誠の文字となつて國旗に躍る。日本においてのみ見ることの出来る誠の姿といふべきではなからうか。



新 人 材 論

——時局下の彦中生に寄す——

客 員 尾 田 鶴 治 郎

制度も組織も大切である。が、之を生み、之を運用するのはいつも人である。科學も經濟も文化も設備も基く處は總て人にある。かくて人材は何れの時何れの國に於ても常に必要の第一として求められ、而して又然く乏しいものである。諸君の日々に勤むる所以も、將來に赴く處も、亦、この國家社會に間し、有爲有能なる人材たらんとする所にある。特に一切を擧げて革新の過程に來てゐる現下の社會狀勢から觀て、現代並に來るべき新時代に適應すべき人材として、諸君の自覺とその日常とは個人としても國家としても實に重大なる意義を有つてゐる。

今次の事變の性質に就いては從來ともいろ／＼な角度から説明されてゐる。一種の思想戰とも見られ、又は正義人道の國際道徳の義にみられ、資源分配の經濟問題と論ぜられ、將又大きく世界歴史的なる文化運動とも觀ぜられてゐる。が、その何れにしても結果として事變を契機として世界の特に日本の客觀的狀勢は急激の如く刻々に變化して行く。日本は今や極東の一島帝國ではなく、大陸へ大陸へと移動しつゝある。東亞の運命を文字通り双肩にして世界各國實力戰のたゞ中にある。而も日本は今總力戰の態勢に於て之に打ち出した序幕にあるのだ。今後の日本を、今單純に逆賭することさへ出來ない大きな變化である。日本の環境も實質も劃期的に大きな波を打つて變化するのである。何れは進歩がこの間に約束されてゐるにしても、この大變の成果を擧ぐべく、國家も國民も今後更に長年月を要するの覺悟を以て大いに覺醒し、實力の持久向上に力せねばならぬ際である。

翻つて今日の世紀を解釋するに、世界を擧げて在りと在る國家も國民もある理想の下にその存在を裁かれつゝある時である。來るべき理想世界を展望する新文化運動の大潮流の中に何國が生き残り何國が亡びる。何人かこゝに亡び、何人か最後に生きる人たるかの裁きの過渡期である。積弊積衰かくて世界の地圖から滅ぶべき國家乃至民族もあるべく、時代の洗禮を受けて追々と新生すべき教育未了の國家乃至民族もあるべく、斷じて舊態依然たるものではない。適應なく機能なく創

意の實力なきものは亡びる。英佛の惱み、ソ聯の足掻きは何を語るか。新興日獨伊の進發は何を意味するか、ひとしくこれ次代を示唆してゐる現象と見なければならぬ。

これを個人の上に見るに今日及今後に生き得るものとしては決して従前のそれではなく、時勢時流に必要とする教養と資質に事缺かぬ堅確強力なる國民のそれなくてはならぬ。かの最後まで、忍耐せるもの努力せるもの良心あるものは滅びぬの毅然たる氣概は正しく今日の諸君の中に無ければならぬ。何にしても従前生活の惡知惡覺を蕩盡せねばならぬ時である。

如何なる國家國民が世界の最後に残るべきか。英佛米露の強大を壓して日獨伊の新勢が新世界の樞軸たるべきかは尙今後の問題である。新興の國、墮ち行く國、この間にあつてその最後を制するものは最も勤勉にして最も道徳的なる有能有力なる國民のそれなくてはならぬ。無能は有能に、不健康は健康に、柔弱と浮薄は堅實と剛強とに世界を譲らねばならぬ。すべては進歩の約束である。選ばれたる國土、選ばれたる人材、即ち時代の要求に適應する間に合ふ人材のみが生き残るべき理法である。

これを諸君、即ち時局下の青年學徒たる諸君の上に、その自覺と反省のために列記するならば、今後その適應性を問はるべき次代要求の焦點として

- 一、愛國の情熱に燃え、至誠清淨、直往の人格なりや。
- 二、體力剛強、如何なる煩劇の事務にも耐へ得るや否や。
- 三、氣力旺盛、意氣軒昂、活潑々地の豪邁なる新興精神ありや。
- 四、節義高く責任感の強固なる人物なりや。
- 五、頭腦明敏研究心強烈、よく科學しよく哲學し、世界事情、産業經濟狀勢を把握せる機能の天才、創造の天才なりや。

の諸點にある。かの個人本位の低調に左右し、唯美柔弱の塔内に籠居し、又は舊套を墨守する消極無發の生活者は既に求めて時流より落伍せるものと謂はなければならぬ。諸君は須らく前記五項に就き此の際の自己を検討し考察し、一意刻下の修養と鍛鍊とに備へなければならぬ。

往時は門閥地位の遮遏があつた。機關、居住の不便があつた。習俗係累の不如意があつた、壓迫があつた。然るに今日に

於ては殆んど自由である。繼てが實力實質を條件とする。所謂人材本位である。大活示顯、高天瀾地、あくまで天才を伸ばし得べき機会に來てゐる。勉めざるべけんや。

この理は日本國家の現態にあつても恰當する。日本は今や英佛に何の學ぶべき場合ではない。米露に何を倣ふべき時でもない。歐米文化の輸入の必要は業に過去に屬する。他國に遙か優れる傳統の國民性がある。國是がある。今や新日本形成の意圖に於て自國の本來を創造し發展すべき理由と狀勢を獲得したのである。一路直往あるのみ。世界の平和は今後日本が世界最大の實力國たるの日までは得られないだらう。而して私はその日のあることをかたく信じてゐる。世界最大實力國の最優秀實力國民、諸君の當來は洵に多幸なりと言はなければならぬ。

こゝに於て、ひそかに本校々訓の精神を思ふ。敬神崇祖、質實剛健、勤勉力行、和衷一心、すべてこれ我が國肇國以來の傳統にして而して又新國家興隆の要素である。且日に之を力め心身に體得發揮するの日は、新日本即ち世界最強大優秀日本の時至る日である。特に以て至誠奉公の國士たる、これ興國々民の眼目である。至誠とは無私である、献身奉公である、私情利害を以て動かす、純美正直、理窟でなく觀念でなく直覺的に國士たるべくして國士たるのである。

この校訓を以て出發し、又以て生涯を之に始終する諸君の本格は、正しく新日本形成の國家の使徒たる位置である。またこの體認がそのまゝ諸君の生命と希望とを生かすの理である。祖國の使徒たる諸君、諸君の生涯を一貫する生活意志が精神的一體となつてすでに國家である。至誠奉公の國士、國家のためにその生命と希望とをさゝげて乃ち自らの生命と希望とを活現する、その實踐は、國家の時艱に處し、之を日夜に力むることである。即ち前記五項に載する人材となるにある。

純美なる國民的品性、剛強なる意志的人物、充實せる體力、豪邁なる情操、この一道を貫行して以て汝が可能性を獲得せよ。眞自我を實現せよ。國家は切にこの一事を諸君に期待してゐる。

ある哲人は「最後にのこつて世界の未來を支配する民族は、アングロサクソンでもない。ラテンでもない。獨逸民族でもない。それは、これらのどの民族よりもすぐれて、最も聰明で最も勤勉で、且つ最も道德的な國民を有する民族の手に歸するであらう」との意を言つてゐる。

國家の存在の實力は人か、物か、金か。その何れにしても根本は人である。人材の資質如何にある。これを個人の生命の上に見るも、最も聰明にして最も勤勉、且つ最も良心的なる人材こそ最後にのこるべき人材と言ひ得る。人材なる哉人材。而して時代の要求に反せる人材は終に轉落せざるを得まい。新人材を目標として諸君の自力向上を努力を祈る。

生徒作文

武漢陷落の報を聞く

五年 嶋 倉 昌 一

勇猛果敢なる我が皇軍は歩武を北支に進めてより僅か一年三ヶ月にして所謂武漢三鎮を占領して世界戦史に輝かしい一頁を加へた。武漢三鎮——殊に漢口は昔から支那に於ける軍事、外交經濟の要衝であつて、此の要地を短日月に占領された蔣政權は最早支那を統率する能力はなく、地方の一政權になり下つてしまつたのである。

こゝに戦局は次の段階に入るのであるが、地圖を擴げて見ても如何にこれからの戦闘が困難であるかと分る。其上此間の南支上陸以來戦線は南北何百里といふ長いものになつた。

これが互に聯絡をとり乍ら、チリ／＼と敵に迫りつゝ奥へ／＼と追ふて行くには余りにも山險要害の地が有り過ぎる。しかも蔣介石はさまざま疲勞した様もなく彼の誇りとする直系と機械化部隊とを以て我に抵抗せんとしてゐるし、支那に直接利害を持つ第三國も依然對支援助の手を緩めないやうだ。彼の言ふ長期抗戦も一面の眞理を持つてゐる。従つて所期の目的達成の爲には我々も彼に備へて各般の準備を進めて行かなければならぬ。こゝに長期建設といふ事が叫ばれる。

實に戦はこれからだ。この期から外交戦、經濟戦が著しく目立つて來る。其の戦士は我々統後國民だ。外交は假令其の方面の人々に委任するとしても、我々は經濟戦には是非参加せねばならぬ。参加の方法は政府の諸種の經濟政策と歩を同じうするにある。政府の命令する所假令一身の利を犠牲にしてでも統制に従はなければならぬ。出來得る限り生活費を切りつめ

其の残は國家に捧ぐべきだ。
長い年月だ。何時かは勝利が齎らされるのだ。其迄は如何に苦しくとも政府と協力しなければならぬ。これが經濟戰士の重要な任務である。

我等は皇軍の勇士に感謝しつつ、勇躍して經濟第一戦に赴かんとしてゐる。
喜びを傳へた武漢陥落の報知は亦一面國民全体への召集令状でもあるのだ。

時局の認識

五年 富永信雄

現下の如き重大時局に際しては、我々は事變の由來、時々の進行程度、内外の情勢を明かにし政府は政府國民は國民各其の機能を發揮して、終局の目的に向ひ勇敢に邁進せねばならぬ。之が爲の計畫實施は或は法律上の手段により、或は協同的個人的に着々進められてゐる。其の大本を操作して居るのは政府であるけれども、分子的の働は國民全般であり、何れを重く何れを輕しと云ふ事はない。何れも時局に對する負擔を爲しつつあるのである。

顧みれば我が建國二千五百九十九年、其の間外國と事を構へた國家的大事件は、神功皇后の三韓征伐、元寇の役、豊太閤の朝鮮征伐、日清戦争、日露戦争で、それに次で今回の支那事變である。

以前は世界の交通未だ開けないで、遠き西洋諸國との交渉等は全く無かつた。而し日清、日露戦役は世界の交通もはや開け、列國の環視の下で行はれたのであるが、當時の國際關係は今日とは全然異つて居た。

日露戦後我が國の東洋に於ける地位が一變してより責任が益々重きを加へた。即ち西洋に對しては東方亞細亞を護り、同種民族の威嚴を保つ任務は、一に我が帝國にかゝつて來たのである。それ故以前我が國を小兒の如くに考へ、憐れみの眼を以て見てゐた歐米列強は急變し、自國が支那に有する權利を損なはれないかと疑懼するのは自然の勢である。其の結果我が國と支那と事ある毎に支那に同情し、我が國を侵略國と呼びて今回の如き公然支那國民政府を援助する者さへ出て來た。之が爲事變の終局を妨げ、我が國に餘計な苦しみ及ぼすのみでなく、支那民衆にも無益に多大の苦惱を與へつつあるのである。

ある。列強中ドイツと伊太利とは赤化防止に我が國と協力してゐるが、徒らに此等の力を頼むことは不可能である。従つて我が國は獨自邁進し目的を貫徹するの一途あるのみである。

戦ひは急速に進展して、今や我が軍は國民政府第三の首都とも言ふべき重慶を指してゐる。
之を屠るは近きにあるだらう。只問題は國民政府が内部の自壞作用で何時崩壊するか、何時迄續くか、何處まで落ち延びるかである。經濟上其他の關係で、崩壊は遠くないと信するが、利權目當に援助する外國もある故、何人も其の時期を明言し得る人はあるまい。勿論帝國としては速戰速決は期する所で、電光石火の行動をとつてゐるが、蔣政權の腰が砕けなく彼一流の抗戦が続けられるれば之を取押へるのは容易でない。それ故事態の進行如何あらうとも、びくともしない丈の覺悟は我が國家國民が擧つて持つべき所である。

我が理想の學生々活

五年 一谷道雄

「現今の社會の最も悲むべき、憂ふべき、大なる缺点是 人生に對する確固たる信念の根底が作れて無い事である。」とは我等のよく耳にする言葉である。事實、確乎たる思想上の根底を有しない生活の如何に空粗にして不安なものであるか。人は内心から満足して、利那主義の生活が出来るものではない。

私は嘗て「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり」と中庸に讀みて、誰でもさうであるが、別けてもこれから出世しようとする青年は從て他から迂愚と嘲られやうとも、愚物と嗤はれやうとも、終局の勝利は必ず誠實の者に歸するのである、と云ふ確信を持つて事に當らねばならぬ、と考へ誠實を以て我が學生々活の理想とし來たつたのである。

寡黙の英雄、東郷元帥も「誠實は最後の勝利なりと確信せよ」と説き、誠實は元帥が觀念の基礎であると同時に、人生の根幹と認めて居る所であり、英國の文豪カーライルも「英雄の最も肝要なる資格は誠實であると言ひ、有名な俳人鬼貫も、「まこと」を俳偕の道により説いて居る。斯様に誠實は古より我等青年に對しては特に脊々服膺すべき金言であつたのである。

孔子の如き常に村夫子として放浪の生活を送り、釋迦も亦王子の位を棄て、乞食の群に入り、基督は十字架に刑せられて短命に終り、何れも皆、其の位を得ず、當世に容れられざりしが、其後千歳の後まで敬服されるのは、唯彼等が誠實もて終始一貫せし故に外ならんや。

故に我等は誠實の二字を體して以て希望に充ち満ちたる學生々活を送ることを理想として居る。

山を登る

五年 西山子得

山を登る心は人生を旅行く心である。

此の夏、友人數名と、誘はれるまゝに、伊吹山に登る機會を得た私は、初めての登山に、かなりの苦しみを味つたのであつた。

月は美しく輝いてゐるのだが、鬱々として繁る樹木のために、光が達しないから、足元は暗く、しかも相當な急坂で、石のごろ／＼した道である。聞く所に依ると、人々は、この一合目の坂を「がつくり坂」と呼んでゐるとのことである。

やがて、この急坂をあへぎ／＼登りつめると、そこからは比較的ならかな斜面である。馴れない故か、苦痛でもあつたが、兎に角、頂上へ辿り着いた。こゝで寒さに震へながら御來迎を待つ。

御來迎だ！ あゝ、見よ。東雲の間から、アポロの金輪は靜かに、今や私達の眼前に昇り來つたのだ。「あゝ、登つて來てよかつた」と思ふ。あの一合目の急坂で、斷念したりなどしてゐたら、此の感激を味ふことは出来なかつたであらう。

私達の人生も、亦この山を登るのと少しも變りはない。人生の山は大きい、山が大きければ、その裾野は廣い。廣い裾野には幾多登山口がある筈だ。

私達は、數ある登山口のどれを選ぶも各人の隨意である。然し、一旦、登り初めたら、どれだけ苦しくても、途中で斷念したりしてはならない。初めの間の苦しきは、やがて後になつて、大いなる樂しみとなり、しかもその後は易々と人生の頂上に立つて、朝の日輪に向つて、心の奥底から、快哉を叫び得る日があることを思つて、その苦しみに堪えねばならない。

山を登る心は人生を旅行く心である。

夜の瞬き

五年 満島俊次

初秋や合歡の葉ごしの流れ星

子規

八月もとづくに半ばを過ぎた今日此頃、残る暑さも日々傾きしつとりと露おく草の虫のすだきに早くも訪れる心づくしの秋風を感じるやうになつてきた。

過ぎゆく夏に名残を惜む蟬の聲も、もうたそがれ行く夕闇につままれて、いつしか鳴りを靜めてゐた。今迄取り残されてゐた宿題をにらみつけてゐた僕は、此の時不圖顔を上げて宵の夜空に目を轉じてみた。西空には先程、最後の赤さに夕焼の名残を止めて沈んで行つた日輪の後を追つて、濃く淡く紫色に染められた一群の雲が瑠璃色の宵闇を作つてゐた。それは、夕陽の華かに美しい色とはまた異つた美しさの夜空だつた。夜の序曲——さうだ。黄昏空の美しさは、やがて下さるべき夜のとぼりの前奏曲だ。僕は窓を明けた。そして半身を屋根に乗出すやうにして、もう一度暮色の空を見直した。

西の空にもう一番星が瞬いてゐた。宵の明星。それはこの美しい名にふさはしい金色の光で輝いてゐた。ある詩人は夜の雅致と神秘とを月に感じてゐた。だが僕は夜の神秘性を冷い月よりも寧ろ空一面にばらまかれた星の瞬きに感ずる。

金星、北極星、北斗七星、更に流星と數へくれば、限りなき美しい夜の瞬きである。そして僕等は、此の數限りない星の世界をのぞき、見たゞけでも、幾つかの美しいお伽話のやうな傳説を思ひ出すことが出来るのである。

暫くの間おつと空を見つめる。晝間の暑さを忘れてしまつたかのやうな涼風だ。

哀愁の初秋か？ 感傷の初秋か？

だが此の時我に歸つた僕には初秋の哀愁も感傷もなかつた机の上は現實の世界だつた。

西村君の死

五年 江川 昌 男

西村の死を友人に聞かされた時、あの日の西村の姿がまぎ／＼と眼の前に浮んで、暗然として涙を呑んだのだ。さうだ。彼に遇つたのは一ヶ月ばかり前の八月六日なのだ。

道を歩いて居た僕ははつとした。瞳に映つたのはあゝ忘れもしない西村の寒れた姿ではないか。彼が病氣である事は知つて居たが、九月からは再び一緒に勉強出来るだらうと待つて居ただけに、寒れた彼の姿を見ては、胸が塞つて何も言へなかつた。繻帯を耳に捲き頬の肉は落ち目は凹み、これがあの西村かと我が眼を疑ふ程病み疲れた西村、蒼白い顔をして居た西村、弱々しく歩んでゐた西村、僕を見て立ち止まり、蝙蝠傘を手にしてやつと身体を支へてゐた西村だつた。そして耳を手術したので脳は絶対に使つてはならぬ。その爲もう一年休學する、彼の病中最初に遇つたのが外ならぬ僕だつた事等。切れ／＼に語つた西村だつた。快癒を祈り、再び共に勉學に勵まん事を誓つて別れたが、嗚呼何と云ふ運命の神の悪戯なのであらう。神に祈りし甲斐もなく、佛に訴へし甲斐もなく、あゝ君は遂に永遠の旅路に死の一人旅に。無情なる死神は遂に彼を知らぬ他國へ連れて行つてしまつた。あの前途有爲な西村を。聞けば西村君は長男とか。嗚かし御両親の御歎きは切なるものがあるだらう。同じ教室で机を並べて學んだ二年間も遂に悲しい思出となつてしまつたのか。彼に遇つた最初の友であり、恐らくは最後の友であつたらう自分は、變轉極まりなき人の世に一入悲哀を感ずるのである。

今眼を閉じて靜かに思ひを過去にめぐらす時、日頃から血色のすぐぬ彼ではあつたが元氣だつた姿と寒れ果てたあの時の姿が交る交る腦裏に浮んで来る。

あゝ業半ばにして悲しくも幽明境を距てられた西村君、君の御魂の瞑福を皆して祈らうではないか。さらば友よ。佛の御手に抱かれて瑠璃の花園に安けく眠りませ。

勤勞奉仕作業の感想

四年 保 滌 義 亮

學校から勤勞奉仕作業の發表があつてから、僕は神の子となる日をどれだけ待つたことであらう。

八月二日、永遠に忘れ難い印象深い奉仕作業第一日の幕は切つて落された。その名も高い多賀大社——幸福な我等が大社に第一步を印した時の僕の感じは、何とも言ひ表はされない所謂筆や口にては表し難い崇高な嚴肅な感にうたれ、一所懸命奉仕しようと願つた。日頃から一緒に笑つたり泣いたりした友どちと座を左右にして食膳に就いた時の氣持は又格別だ靜坐!! 肇國以來の日本を表示する語の様に思はるゝ靜坐に列して 過去の自分を靜かに靜かに省みる時其所に涌き上る偉大な力即ち、自覺がわが將來を幸福に導く様に感ぜられる。

自づと頭の下る森嚴な神殿、足の爪先から頭の天邊まで冷渡るかの如く拭き磨かれた廻廊、心も五體も映するかの様な廊下、巫女の緋衣の姿の反映、神苑ならでは味はひ得られぬ感じがした。

朝霞を身に浴び、玉砂利を一つ一つ除けて木の葉を拾ふ時少しも清くと思ふ心が出て来るのは神の心でなくて何であらう。あの清掃した後、朝餉の膳に向ふすが／＼しい心根等々神の子として限りなき感懷を胸にして四日の朝歸途に向つた。

勤勞奉仕の感想

四年 河 崎 敏 男

八月二日から三日間の多賀大社に於ける宿泊集團勤勞奉仕は、我々にとつて終生忘るゝことの出来ない大行事であつた。僕等の奉仕の日は雨も風も共に大變はげしい時であつた。併し今まで嘗て感得したことのない位有意義に過すことが出来た。その中でも最も意義深く感ぜられたのは、拜殿一帯の清掃と、多賀小學校に於ける開墾であつた。先づ拜殿一帯の清掃。檜のにはひも新しきこの社で、拜殿の掃除を奉仕することの出来たことは何と有難くも又うれしい事であつたらう。僕は第四

班で拜殿兩側の石廊下の掃除を奉仕した、石廊下はすこし神殿の方に近く、他の班の持場より神殿に近いので、僕は他の班の者よりもずつと神様に近づけたと思はれて、うれしく又有難く感ぜられた、これは僕だけではなからう。即ち第四班の全部の者が思つたことだらうと信ずる。第二日の夜の感想発表座談会の席上で、寺本先生も拜殿一帯の掃除を心から喜んで居られるお話があり、そして先生はこれより以後は我が多賀大社と言ふやうな氣持になるであらうとおつしやつたが、誠にさうなるであらうと思つた。次に多賀小學校に於ける開墾、小隊は五班に分けられた。さうして各班はそれ／＼持場について一心に、折柄降つてきた雨をももともせず働いた。土に塗れ、汗と雨に濡れそぼちたる一同の姿。これが第二日の奉仕の意義あるところである。我等は統後の守りを固くする一員である。皇軍の向ふところ敵なく、連戦連勝、破竹の勢で進軍しつゝある。けれどもその裏には我等の奉仕した雨の開墾よりもつと／＼困難なつらい事がたくさんあるのだ。それを征服して、是の如き赫々たる武功を輝かして居られるのである。時局の重大なる眞只中にあつた宿泊勤勞奉仕の行事を爲し、皇軍將士の萬分の一の體驗を得たやうに考へられ、皇軍の艱難辛苦を偲ぶと共に一層感謝の念を深くしたのであつた。實に、尊い、有難い體驗であつた。

漢口陥落と吾人の覺悟

四年 宮 下 勉

漢口陥落！ 萬歳！ 私は日本國民の一人として歡喜感激の萬歳を叫んだ。嗚呼、皇軍將士の功此處に成つて、早くも漢口陥落のニュースを聞くとは。

其の翌日、旗行列に提燈行列に、漢口陥落を祝賀する人々の波が町の中を流れ流れて行つた。見よ東海の空明けて——躍り上るが如き歡呼の愛國行進曲、旭日高く輝けば——潮の如く熾烈な國民歡喜の叫びは續く。

此の際我等は、徒に輕跳浮薄なる行動は飽くまでも慎まねばならぬ。冷靜に聞け、新聞紙上に街頭の貼紙に或は進んで憂國熱血の士の獅子吼に、歡喜の國民へ警鐘を亂打する言論を——。長期戦は此れから。國民は皆戰士。總力戦。浮くな絡めよ、心の戦。等々——

更に眼を開いて世界を見よ。東亞に情勢を探ぐる歐米人、ソ國極東軍の動勢。又、蔣介石は尙ほ豪語して長期抗戦を叫んで居る。之が果して斷末魔の足搔きとのみ見る可きだらうか。彼の妄語を一笑する前に彼の背後に躍る陰險な英露佛國の援蔣を認識しなければならぬ。今後愈々、諸外國は我を經濟的に壓迫するだらう。或は、精神的に我を疲勞させようとするだらう。我等は決して戦捷の氣分に酔つてはならぬ。更に大なる活眼を開いて、長期戦に耐へねばならぬ。

特に、我等青年は、非常時第二國民としての覺悟を深めなくてはならぬと同時に、重大なる義務を負はねばならぬ。先生先輩はよく云はれる。此の事變の整理は、君達の義務であり名譽ある特權である。と。我等は之を漫然と聞き流してはいけない、持たざる國日本が大陸發展の曙光を認め始めた今日次期國民たる我等の時代に旭日の勢を以て大偉業を完成せしめねばならぬ。

漢口陥落の今、長期戦に入つた今。我等青年は大なる使命を今更乍ら感じるのである。戦捷に酔ふべき時ではない、長期戦、何ものぞ。我等は如何なる試練にも耐へうる自信は十分だ。此の腕此の體を見よ。東洋平和を建設すべき意氣に燃える我等である。

漢 口 陥 落

三年 松 田 又 次 郎

「昭和十三年十月二十七日午前五時三十分武漢三鎮を完全に攻略せり。」との大本營陸海軍部の發表を聞くや、誰一人として感激せざるものはなかつた。即ち、廣東攻略以後僅に五日で敵が第二の首都として死守した武漢三鎮も疾風迅雷、勇猛果敢なる我が皇軍の前に脆くも壊滅したのである。皇軍の威武彌々高く、今次事變中稀有の大激戦武漢三鎮攻略の大業も茲に見事達成したのである。これ畏くも大御稜威の下に忠勇義烈なる將兵の方々が困苦缺乏に耐へられて、不撓不屈勇戦健闘なされた賜に外ならないので國民齊しく感謝感激に堪へない所である。

吾等統後の國民たる者は赫々たる皇軍の方々の御偉勳を鑽仰しその人間業とも思はれない御勞苦を偲ぶと共に、益々統後の強化に努め各自の業に勵まなくてはならぬ。今や陸海軍の一致團結によつて敵の一大據點漢口は完全に陥落したけれど

も、戦はこれで終了したのではない。否、戦はこれからである。戦勝に酔ふ事なく、飽く迄長期建設に對して益々堅忍不拔の志操を堅持しなくてはならぬ、吾人は深く時局の重大性を認識し、協力一致以て國威宣揚國策遂行に邁進しなくてはならぬ。かくして初めて東亞永遠の平和の爲に第一線に活躍して居て下さる皇軍將士の方々に對して眞に感謝の誠を捧げる事が出来るのである。

嗚呼！感激の日章旗は今や支那の主都武漢の秋空高く翻翻と翻つてゐるのだ。嗚呼！此の歴史的感激！全國津々浦々に横溢して居る此の感激を見よ。今や大日本帝國は世界全民族の驚歎の裡に八紘一宇てふ國策遂行の第一歩を踏み出したのである。世界戦史に輝やく武漢三鎮陥落こそ大東亞更生の第一歩である。

勤 勞 奉 仕

三 年 吉 田 一 雄

三日間の奉仕に就いての感想は色々ある。こつ／＼と一本々々丁寧に草を抜く。段々草のない土地が廣くなる。見る間に吾等百五十人の力は結合してとても出来さうに思はれなかつた廣い土地は草一つ止めない程に美しくなつた。その美しさ！苦心の結果の偉大さ！此の時には心身が淨化された様な爽快さを感じ、集團力の大きい結果を如實に體驗した。

此の事實は勤勞奉仕と同様に學科にも持つて行けると思ふ此の心で新學期に入りたい。併し僕は現狀では未だ足りない様な氣持のした事もある。少しの勞働に挫ける様な體力此が非常時日本を雙肩に擔ふべき青年の實際の姿か、實に慨歎に堪へない。中等教育を受けた青年は身體が微弱だとよく年老いた人は云ふ。

残念だが現實の有様を見せつけられては仕方がない。僕等は未だ三年だ。今からでも決して遅くないと僕は信ずる。運動に勵み體力を鍛へようではないか。此の勤行で僕の精神的に得た收穫は物質的に奉仕した結果より大である。

代 用 品 時 代

三 年 平 井 昌 吉

現今の日本は世を擧げての代用品時代である。支那事變も早や一年を過ぎること一ヶ月に及び、我が忠勇なる將士の方々は今に酷寒の冬が訪れようとしてゐる支那大陸で漢口へ漢口へと膺懲の駒を進めてゐられる。

戦ひは長い。それにつれ銃後日本も愈々長期抗戰の臍を固め國外からの輸入を防ぎ、我等の皇軍の方々に不自由な思ひをして戴かない爲に色々物を代用品で我慢せねばならなくなつた。

先づ最初に我々は綿の使用が出来なくなり、ステープルファイブアールが代用品として登場した。此を始として次から次へと矢織早の統制が加へられ、續々として代用品が登場した世人は此の矢織早の統制に最初は呆然とした様子であつたが今では此が何の苦痛でもなくなり、色々不足、即ち必要に應じて種々の物が發明されるので却つて便利な位となつた。併し此所に重大なる問題は、世人の幾らかの人々は國策を穿違へてゐると言ふことである。現在自分が持つてゐるもので未だ十分用が足せる物を捨て、國策に順應するのだとばかり新しく登場した新品を買つて用ひる。斯様な人は全然國策の意味を何も知らない人だ。併し自己の事を反省すればこんな事はいくらかもある。無駄が家中にごろ／＼してゐるものである。今日の本はこんな者が一人もあつてはならぬ。

一体日本人は熱し易く冷め易いと言はれるが、今度の場合も時代の急激なる變化にかつとなつたのではあるまいか。こんな事では世界のリーダーとして恥しく思ふ。我々日本人は冷靜に物事を考へ國策に適つてゐるかどうかを考へ、よく時局を認識し、愈々長期戰の覺悟を強くし、正義の道に向つて力強く堂々と邁進しよう。

滿 洲 の 落 暉

三 年 西 村 義 廣

赤い光がぱつと僕の目を鋭く射た。三日も乗り續けた汽車の旅の單調さに飽きて、先刻からう／＼と眠りを催してゐた

僕は、不意に投げつけて来た強い光線にすっかり眠氣を覺まされた。僕は今滿洲里行の濱洲線の車の一隅に居るのだ。
一本調子な窓外の風景は變化に富む山紫水明の國土に生活する日本人を喜ばす事は出来ない。寧ろ飽々とした味氣ない感じを催させるだけだつた。それは見る人に依つて異なつた感じを起すだらうが、少くとも僕には風情のないものであつた。

今も又その氣持で「眩いなあ」とこぼしながらゆつくりと身を起した。
嗚呼！僕は思はず息をのんだ。「おゝワンダフル」大袈裟屋のアメリカ人が見たならば何と言ふだらう。無暗に感歎する事だらう。宵闇の訪れかけた廣い曠野の隅にほの見える大興安嶺に太陽は將に沈まんとしてゐる。汽車間近に滿洲の少女が背の低い白馬の轡を執つてゐる。それが口では言へない滿洲らしい、滿洲情緒とでも言ふやうな詩趣を感じさせた。彼方の方にも馬牛の一團が悠々と草を食んでゐる。それ等の上に眞赤な落日が照り、廣い野の縁に草を食む牛馬に、赤い夕日が背景となつてゐる。此の廣々とした情景は實に一幅の名畫と言ひ得よう。そして此の名畫は何人にも詩的な感情を起さずにはおかないだらう。僕は思はず口號み初めた。こゝは御國を何百里、はなれて遠き滿洲の、赤い夕日に照らされて、友は野末の石の下……と。

漢口攻略成る

二年 山 口 景 三

長針は三十分を示してゐる。あわてた僕は鞆を引提げ家を後にした。土橋へ出てマルピン前を曲がらうとした時、思はずハツとして足を止めた。そして自分の目を疑つた。散髪屋の前の電柱に貼つけた紙には「漢口北端を占領す」と大書してあつたのだ。次の瞬間心の底より萬歳の聲がほとばしつた。それは喜びと驚きを兼ねた眞の言葉だつた。思へば數日前廣東を占領し、その喜びの未だ消えない今であつた。僕等が想像もしないことだつた。新聞等に載つてゐる外國人の豫想ではまだ相當かゝる筈だつた。我が皇軍はそれ等の豫想を破り今漢口へ突入したのだ。僕が自分を疑つたのも無理はなかつた。否、僕許りか全世界の人が驚歎したことだらう。然し考へてみれば我が神速果敢な皇軍にありさうなことだつた。現に南京占領がそれだつた。完全に世界の豫想を破つたのだつた。然し又一方その蔭には我が忠勇なる皇軍將士の尊き犠牲のあることを忘れてはならぬ。多くの人が漢口を見ずして斃れたのだ。我等の千原先生も實にその中の一人だ。翌日武昌突入續いて二十七日完全に武漢三鎮を占領したのだつた。此の打ち續く快報に日本全國はわれる様な歡喜のどよめきにつゞまれた。そして各所に旗行列提燈行列が終日續いた。かしこも二十六日の新聞には「大元帥陛下御満足に拜す」との記事があつた。我等は此の歴史的快報を心より喜ぶと共に戦争が今や漸く本格に入つたことを知りそして今後は之が最悪の場合に備へなければならぬのだと思つた。

漢口陥落

二年 西 川 登

全日本國民待望の支那軍最大の抗戦本據漢口も、遂に陥落したことは、誠に欣ばしいことです。我が陸海軍の精銳が、空に、陸に、海に、支那軍必死の防戦を撃擯して今日の如く列國驚嘆の的となる位の、赫々たる戦捷を得たことは、偏に天皇陛下の御稜威のしからしめるところは勿論、戦に参加した我が忠勇なる將兵が、あらゆる苦難に打勝ち、一死報國勇敢に戦つた事が、此の大勝利を招いたのであり、ただ、感激の外なく、又戦陣の間護國の英靈となられた、幾多の勇士に對して謹んで哀悼の意を表し、又戦に傷つき、病に冒されたる多數の勇士に對し一日も速に快癒の日來らんことを祈らなければなりません。先にバイアス灣に敵前上陸して以來僅か十日そこくで廣東を攻略し、更に武漢三鎮陥落の戦勝に聲高らかに、萬歳を叫び得ることも、日本國民ならでは味はへぬ喜びです。しかし戦はまだ終つたではありません。寧ろ聖戦の第一歩を踏出したのです。我等は徒らに戦勝氣分に酔うてはなりません。勝つて兎の緒をしめよの言葉の如く國民は皆決心を緩めてはなりません。今や我が帝國は將に新日本の建設、否、新東亞の建設に邁進してゐるのであります。此の時に當り、吾人學生は熱心に學業に勵み、健全なる身体健全なる精神を養成し、將來の日本を背負つて立つ立派な人間とならなければなりません。戦場で勇しい手柄を立てた勇士の奮闘と勞苦を感謝する心になれば、如何なる艱難にも堪へられるのである。我等は此の際強く正しき日本人となるべく決心を固めなければなりません。戦捷の眞意義は尙今後にあるのであります。吾々は漢口陥落を以て意を安するでなく堅忍持久益々將來に努めなければなりません。

勤勞奉仕についての感想

二年 松原義照

近頃新聞紙上で集團勤行とか、勤勞奉仕とかが、非常に喧しく書かれて居ます。

これは多くの場合大勢の者が集まつて、或る事業に對して私利私慾を離れて心から勞力を捧げる事で、誠にいい事だと思ひます。僕達の中學校ではすでに本學年の始めから實施されて、現に僕等も此の春ごろは、城北の縣營綜合運動場建設の御手傳ひに、又此の暑中休暇中には此の他學校・芹川堤及び城山等に於て、三日間營々と勤勞奉仕を致しました。元來僕は如何なる仕事をするにしても、さう不快な思ひでした事はないのですが、今回は何かしらぬ殊の外心の躍動を覺えたのであります。學校の窓硝子一枚拭くにしても、堤の草一本刈るにしても、或は城山の草一本引くにしても、是れが唯單に我が校の爲ばかりでなく、彦根市又は滋賀縣の爲ばかりでなく、實に我が大日本帝國の國策に順應する聖業の一を果しつつあるだと思ひましたら、現實の仕事は假令小さくとも、其の精神たるや實に偉大且つ崇高なものと感ぜられ、一入身を入れて愉快に働くことを禁じ得なかつたのであります。勤勞奉仕とか集團勤行とかは今後の日本のため、又若き我等のため更に一層の必要があり、實踐があるべきだと思ひました。

秣刈り

二年 保知誠次

國家總動員の折から縣下一齊に農村では秣刈りが行はれ、僕の宅でも三貫目の秣を出すことゝなつた。

七月二十五日、暑中休暇に入つた直後兄と僕と叔父と従弟の俊一君と、そこへ丁稚の定吉とを加へて同勢五人。自轉車の一部隊を組織して勇躍秣刈りに出動した。

途中の事である。田の中で仕事をしてゐた見知り越しのおばあさんが、南瓜の様に顔に幾筋も皺をこさへて「五人がめいめい入れ物も後に附けて一列に、まあ秣刈りよの。」と言つてハツハツハハと伸し上るやうにして笑つてゐた。僕等は應召された兵士が見送られてゐる様な心地になり、こちらもワツハハと笑ひながら元氣よくペタルを踏んで走つた。カラリと晴れた大空には太陽も笑ふかの様に照つてゐる。僕は「これも御國の爲だぞ。」と心を引きしめ、目的地へと向つた。

さて、來てみると、豫期してゐた秣が一向にみつからない既に皆の人々によつて刈り取られたあとらしい。一同は急に氣を腐らしてしまつた、それでも暫らくの間はせつせと秣を求めては刈りとつた。が一向はかどらない。ふと右を見ると小さな井戸がある。薄をかきわけて其處へ行つて覗きこむと中に龜がある。僕はしめたと思ひ、兄を呼んで苦心の末やつと生捕つた。大きな龜だ。僕等は「龜は背向けにおけば起きない。」などと言つて暫らくは玩具にして遊んでゐた。そして「さうだ、これを弟に持つて歸つてやらう。さぞ喜ぶことだらう。」と思ひつき、拾つて自轉車の後の入れ物に入れかけた。すると叔父が龜を掴み上げてポイツと遠い方へ投げてしまつた。「わしは浦島太郎ぢや、お前達は龜を持つて遊んで仕事をせんであかん」と言つた。秣はなし皆忘却したので叔父も大分怒つてしまつたのだらう。僕等はブツブツ言ひながら又道をかへて、秣を探した。と、左の畔の方へ行つた兄が突然「おい、ものすぐあるぞ！」と大聲をあげた。僕は畔へ飛乗つて走つて行つた。見るとあるはく澤山の秣だ「それつ皆んなで取れ。と大いに元氣づいて秣刈りに熱中した。たちまちにして五人共全部の入れ物は秣で一杯になつた叔父は「あの龜を逃がしてやつたのでその禮に秣がみつかつたのだ。あそこにあのまゝまだ居たら少しばかりしか今日は取れやしなかつたのだ。」と得意さうに言つてゐた。かくて目的の收獲が出來たので、僕等は勇ましく、心軽く揃つて歸途についた。

勤勞奉仕の感想

一年 佐野勉

僕達の勤勞奉仕は八月二十七・八・九日の三日間であつた。校長先生の御訓話の中で、特に僕の心に深くきざみつけられたのは「黙々として働く」のそれだつた。僕は「よし、今度こそ黙々として働くぞ。」と決心を固めた。だが、あとになつて反省して見ると、どうも徹頭徹尾守りきれなかつた。先生に注意さへうけた。「黙つて働く」といふことは如何にもむづかしい

ことだとつく／＼思つた。

第一日目、道路の草を刈つてゐる時、道行く人達から御苦勞といふ言葉を聞いた。僕は太へんよい氣持にさせられた。僕等は固より何もお禮をいつてもらふ爲にやつてゐるのでない。であるが、やつぱりさう言つていたゞくと悪い氣持ではなかつた。二日目の土はこびは四時間近くもぶつ通しで、實に肩が痛かつた、しかし支那で働いてゐる兵隊さんのことを思へば、何のこれしきと思ひ立つと、痛さも疲れもふつとんでしまつた。

一番おしまひの日の先生方の御講評は、僕達の爲に太へんよい教訓であつた。

慰問文

一年 西村 昇

大陸の曠野で御奮戦して居られる兵隊さん。御元氣に軍務に盡して居られますか。僕達は毎日元氣に學校に通つて、一所懸命に勉學致して居りますから、御安心下さい。此の頃は防空演習で、夜など外へ出て見ると、光の漏れてゐる家は一軒もなく、眞暗です。

又九月二十九日には、學校で非常警備演習が行はれました。ちやうど地理の時間でした。けたましくべるが鳴りひびいたので、何事かと思つてゐると、先生が、「一年生は運動場の隅へ集るのだ」と言はれましたので、靴をかけて運動場へ走つて出ました。もう其處には上級生の人が出てゐて、ポンプで、學校の控室の屋根へ、水を一所懸命にかけて居られました。教練の先生が、可笑しげな物に火を付けられました。突然もう／＼と、黄色い臭い煙が、運動場一面に広がりました。僕達はもう其處に居られなくなつて、口を手拭でおほいながら、城山へ避難しました。かやうにして、演習は好成績に終了したのです。

天皇陛下におかせられては、畏くも十月三日に軍事援護の御勅語と、御内帑金三百萬圓とを賜りました。恐懼の極みで御座います。

もうすぐ楽しい運動會です、此方では田といふ田は皆黄色く穂が實り、すつしりと重みを加へ、だらりと首をたれてゐて

所々ではもう稻刈が始められて居ります。

兵隊さん。内地の事は御心配なさらず、安心して軍務に盡して下さい。僕達がかうして日常何の變りもなく、安心して暮して行けるのは、上 天皇陛下の御稜威と、兵隊さん達のおかげです。

僕等は兵隊さんの御苦勞を思ふと、一日も遊んだり、なまけたり、しては居られません。銃後は僕等がしつかり護ります此れからだん／＼寒くなりきすから、御身を大切に、一日も早く東洋が平和になるやうに、しつかり戦つて下さい最後に兵隊さんの武運長久をお祈り致します。

十月八日

彦中先輩の勇士様へ

慰問文

一年 若林 信次 郎

兄さん御元氣ですか。こちらは一同元氣で生活して居りますから、御安心下さい。

此の間、兄さんの戦友が來られて、寫眞等を持つて來て下さいました。其の夜家内一同、寫眞をとりまいて、兄さんの丸々とふとられた御體に、びつくりしました。

私達は銃後學生の精神を發揮する爲に、此の夏休三日間、港灣に出来る綜合運動場工事の手傳に汗と戦つて、勤勞奉仕を行ひました。

九月の始めから教練のある日以外は下駄通學といふことになりました。非常時局の國策に添ふ爲です。僕達が下駄をカラコロ／＼とさせて通學する様子を、想像して下さい。

學校ではもうすぐ運動會が行はれるので一所懸命に稽古して居ります。今年の時局柄、彈藥運搬繼走とか、爆彈三勇士等といふ種目があります。

又此の十月三日には、かしこくも 天皇陛下から有難い御勅語を賜はり、軍事援護の爲金三百萬圓を御下賜下さいまし

た、まことに畏多い極みで銃後國民の意氣は彌が上にもふるひ起ります。
兄さん何卒、此の大御心に應へ奉るべく、お互に益々身體を丈夫にして東洋平和の爲に力を盡しませう。
昭和十三年十月八日
戦地の兄さんへ

漢口陥落

一年 中山 英 男

見よ東海の空明けて

旭日高く輝けば

天地の正氣はつらつと

希望はをどる大八洲……

太郎は今日も愛國行進曲を歌ひながら叔父さんの所へ行くのであつた。今日は漢口が陥落したので夜は提灯行列があるのだ。太郎は胸が躍つてしかたがなかつた。近所の人達はラジオ屋に集つまつて、いつもは子や兄弟などの手柄話をしてゐるが今日は漢口の話で持ちきりだ。何處も彼處も戦捷氣分で満ち／＼してゐる。「今日は」叔父さんが出て来て案内してくれた。太郎「ねえ、叔父さん今日漢口が陥落したんですね」叔父「ああ、さうだ全く皇軍の神速なのは驚ろくね。去年の七月七日蘆溝橋事件から一年と四ヶ月其の間に北支一帯と上海・南京・徐州等を占領して今また漢口を落してしまつたんだ」太郎「勇士の御苦勞が思ひやられますね」

叔父「本當だよ我々がかうやつて安樂にくらしてゐるのも皇軍勇士が支那において活躍してゐて下さるからだ」

太郎「ロシヤとの方も一とまづおちついたしもう安心ですね」

叔父「いや／＼戦ひはこれからだ、「勝つてかぶとの緒をしめよ油断してはいけませんよ」

太郎「あうつかりしてゐた。僕達が油断したら諸外國がどんな事をするかもしれませんね」

叔父「さうだ、ロシヤも、アメリカも、イギリスも、皆油断のならない國ばかりだ。我々は長期建設を目的として進むのだ」

太郎「はあ、わかりました。然し蔣介石はいつまで反抗するつもりでせうね」

叔父「それは分からない蔣の目のさめる時はまだ／＼来まい」

太郎「漢口も廣東もおちたし銃後の守は愈々かたしし皇軍の士氣はます／＼、あがるし日本は萬歳ですね。叔父さん 天皇陛下萬歳を叫びませう」

叔父「よし」

太郎「天皇陛下萬歳。萬歳。萬歳」

——だいいりよく——

人間は、

人間として眞直ぐに育ちたい。

眞直ぐに育てたい。

私はこのこゝろで

日々を生活し、

日々を勤めてゐる。

天地、位あり。

日月、度あり。

人間は人間として眞直ぐに暮したい。

現代日本

五年 谷口 勉

現代日本——。
現代日本は即ち點火された一個の爆彈である。
今將に爆發の瞬間にある。

爆發後の日本は
世界の盟主——
日本を盟主として世界は無窮に續く

六合を兼ね八紘を掩ひ
東亞日本より世界日本へと
わが皇室の御稜威は永久に續く。

今日までの歴史は、各時代を通じての全國民の苦闘は
一つとしてこれが準備たらざるものはなかつた。

あゝ、われ等青年は

大地を耕す者こそは
心の劔揮ふなれ。

怒濤に出で、魚取るも
戦する身と何變る
海の戦士よ漕ぐ舟に
心の銃を翳すなれ。

朝夕機械を操るも
戦する身と何變る
油に塗れるその指に
心の彈丸を發すなる。

身は第一線に立たずとも
戦する身と何變る
銃後我等の苦闘こそ
國に報ゆるまことなれ、

漢口陷落

五年 日下 顯雄

漢口への道筋には日墓章旗と碑が交錯してゐる、還らぬ勇

將に爆發しようとする硬い爆彈のその中核をなしてゐる分
子だ。
その爆發力を負擔する一分子だ。

幸福なるその大任、
重大なるその使命、
青年の一人一人が 充實せる力の塊となるだよ。
怠るな。力めよ。耐へろ。

銃後讃歌

五年 一谷 道雄

降魔の利劍を取らずとも
戦する身と何變る
銃後を守る者こそは
この聖戦を果すなれ。

終日野邊に蹴とるも
戦する身と何變る

士も多い事だ。
漢口陷落の金文字が千原先生の頭上に見える。そして二つ
は永久に離れないのだ。
漢口の上に日章旗を書き付ける、書く手が微かにふるへて
ゐる。
墨黒々と一大ポイントを打つた日本の勝利、それを四方か
ら野獸が見てゐる。

眞夏

二年 藤田 逸人

勝ち誇つた太陽が
赤熱した血みどろの刀を
大地深く突きさした
血は干乾びた空にしぶきを上げ
樹皮がたゞれて赤肌を露出し
毛孔は血でねつとりと塞がれ
あはれにも大地は深い陰影に包まれて
眞紅にやけた空を目的もなく眺める。

漢口陥落

二年 加藤 忠

一、見よ漢口は 陥落だ。

時は十月 二十七日

発表あるや 全國の

サイレンなりて 地はおどる

遂に漢口 陥落だ

喜ぶ我等 國民の

叫ぶ萬歳 天を衝く。

二、ああ歴史的 此の事業

世界に比なき 我が國の

陸海軍と 空軍の

勇猛の意氣 すさまじく

遂に漢口 陥落だ

喜ぶ我等 國民の

萬歳の聲 天をつく。

三、聞け萬歳の あの聲を

我等が送る 萬歳に

赤誠こめた 皇軍の
輝く功と あの意氣で

遂に漢口 陥落だ

喜ぶ我等 國民の

叫ぶ萬歳 天をつく。

四、見よ皇軍の 足の跡

上海南京 倒るれば

一年たらずで 廣東も

敵の頼みの 漢口も

遂に我が手に 陥落だ

喜ぶ我等 國民の

萬歳の聲 天をつく。

五、ああ漢口は 陥落だ。

戦ひ此れで 終ならず

盡くせ我等も 皇軍だ。

東亞平和の その日まで

ああ漢口は 陥落だ。

喜ぶ我等國民の

萬歳の聲天をつく

「日本萬歳 萬々歳」

母

二年 西川 登

戦死の報せに

涙こぼさぬ母が――。

取消の報に

涙一半。

おゝこの母。

軍國の母。

雨

一年 三木 重夫

(一) 細い雨

學校にも町にも花にも草にも、

音も立てずにふつてくる。

小さい木の葉をうごかして、

みんながよつて川へ行く、

川の蛙がうれしさう。

どん／＼まだ／＼ふつて来る。

何時になつたら止むだらう。

(二) 大粒の雨

家にも村にも野にも山にも、

みる／＼うちにひどくなる。

遠くの森がぼんやりと、

黒い雲よりまだ黒い。

大きな川も一ぱいで、

ごうごう音を立て、行く。

今日で三日目まだ止まぬ。

勤勞作業

一年 川上 義雄

君はスコップ僕がモッコ、

赤土、小石、大石も

モッコに入れて運びます。

汗をかき／＼運びます。

かはりだ／＼だ速く願ひます。

こんな傷位なんでもない

兵隊さんの事おもへば

これが痛いと思へるか。

心の鍛練身のきたへ、

こんな仕事は譽れです。

今一打と打ちおろす。